

令和8年度作品集

平和 コンクール



第26回平和絵画コンクール最優秀賞 釧路市立湖畔小学校2年 横澤 希海 さん

釧路市平和都市推進委員会

< 目 次 >

【第26回平和絵画コンクール】

最優秀賞	湖畔小学校2年	横 澤 希 海	1
優 秀 賞	愛国小学校2年	柴 田 羽 宙	
優 秀 賞	湖畔小学校2年	佐 山 煌 河	2
優 秀 賞	釧路小学校6年	倉 坂 心 愛	
優 秀 賞	昭和小学校2年	橋 枝 優 望	3
佳 作	釧路小学校6年	成 澤 颯 紀	
佳 作	鳥取西小学校4年	金 子 楓 果	4
佳 作	愛国小学校4年	笠 島 綾 人	
佳 作	中央小学校5年	大 庭 希乃花	5
佳 作	鳥取西小学校6年	吉 田 彩 乃	
佳 作	昭和小学校1年	牧 陽菜乃	6
佳 作	美原小学校6年	田 口 凜	

【第39回平和図書読書感想文コンクール】

最優秀賞	共栄中学校3年	和 田 あやめ	その日、空は青すぎた	7
優 秀 賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	門 虹 希	平和な明日のために	9
優 秀 賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	清 造 心 花	私達から、未来へ伝え続けること	11
優 秀 賞	景雲中学校3年	黒 滝 琴 音	戦争のない未来へ	13
佳 作	美原中学校3年	宝 輪 優 芽	知る、そして平和へ	15
佳 作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	山 本 和 花	歴史をつなぐ	17
佳 作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	高 岡 くるみ	原爆詩を読んで思うこと	19
佳 作	幣舞中学校2年	朝 倉 奈 々	8時15分の懐中時計	21
佳 作	阿寒中学校3年	柴 木 心 音	「平和の文化」を想像する	23
佳 作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	岡 林 圭 花	人の救い方	25

【第25回平和の主張コンクール】

最優秀賞	釧路湖陵高校3年	青 戸 愛 唯	当たり前でつくる未来	27
優 秀 賞	釧路湖陵高校3年	岡 林 春 花	友の生きる戦争によせて	29
優 秀 賞	釧路工業高校2年	橋 浦 歩 夢	戦争と平和について	31
優 秀 賞	釧路工業高校2年	木 元 悠 斗	戦争と平和について	33
佳 作	釧路工業高校2年	関 嶺 汰	戦争と平和	35
佳 作	釧路工業高校2年	高 沢 光 輝	戦争と平和	37
佳 作	釧路工業高校2年	小 林 日 向	戦争と平和について	39
佳 作	釧路工業高校3年	中 村 将 真	戦争と平和について	41
佳 作	釧路工業高校3年	杉 野 渉	戦争と平和	43

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞） 湖畔小2年 ^{よこざわ}横澤 ^{のぞみ}希海 さん



優秀賞（釧路市議会議長賞） 愛國小2年 ^{しばた}柴田 ^{うそら}羽宙 さん



優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞） 湖畔小2年 ^{さやま}佐山 ^{こうが}煌河 さん



優秀賞（釧路青年会議所理事長賞） 釧路小6年 ^{くらさか}倉坂 ^{こころ}心愛 さん



優秀賞（釧路ユネスコ協会会長賞） 昭和小学2年 ^{はしえだ}橋枝 ^{ゆの}優望 さん



佳作 釧路小6年 なりさわ成澤 さつき颯紀 さん



佳作 鳥取西小4年 ^{かねこ}金子 ^{ふうか}楓果 さん



佳作 愛國小4年 ^{かさじま}笠島 ^{あやと}綾人 さん



佳作 中央小5年 おおば の の か
大庭 希乃花 さん



佳作 鳥取西小6年 よしだ あやの
吉田 彩乃 さん



佳作 昭和小1年 ^{まき}牧 ^{ひなの}陽菜乃 さん



佳作 美原小6年 ^{たぐち}田口 ^{りん}凜 さん



第39回平和図書読書感想文コンクール
最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

その日、空は青すぎた

釧路市立共栄中学校 3年 和田^{わだ} あやめ

——あまりにも空が青い日は、少しだけ怖くなる。

そう思うようになったのは、あの夏の日を読んでからだ。

四月の北海道は、まだ春の途中にある。朝の空気はひんやりとしていて雲の間からはやわらかな日差しがささり込んでいる。遠くの空は澄み渡り、町には静かな時間が流れている。そんな穏やかな日、私はこの本を開いた。そこに書かれていたのは、同じ空の下で起きたとは思えない現実だった。

ある証言では、何気ない朝の光の美しさが語られていた。いつもと変わらない一日が始まるはずだった。しかし、その直後、世界は一瞬で壊される。強烈な光と衝撃の中で、人々は何が起きたのかも分からないまま、すべてを失っていく。私はページをめくる手を止め、「なぜこんなことが現実起きたのか」と考えずにはいられなかった。

特に心に残ったのは、家族の名前を呼び続けながら歩き回る人の証言だ。返事がなくても、呼び続けるしかない。その姿を想像したとき、胸が締め付けられた。戦争は命だけでなく、「当たり前だった日常」そのものを消し去ってしまうのだ。

私は自分の生活を思い浮かべた。学校で友達と笑い、家に帰れば家族がいる。そして「また明日」と言って別れる。その繰り返しだが、ずっと続くと信じている。けれど、この本に出てくる人たちも、同じように思っていたはずだ。その「明日」は、突然奪われた。

そして今、世界では争いが続いている。遠い国の出来事のように感じていた戦争も、イランやイスラエル、そしてアメリカ合衆国などの動きをニュースで目にするたび、決して無関係ではないと感じるようになった。もしこの争いが広がれば、日本にも影響が及ぶかもしれない。そう考えたとき、「平和は遠くにあるものではない」と初めて実感した。

証言者たちは、強い言葉で戦争を責めるわけではない。ただ静かに、自分の体験を語る。その静けさが、かえって現実の重さを伝えてくる。叫びよりも、沈黙の方が深く心に残ることを、私はこの本から学んだ。

なぜ人は、つらい記憶を語り続けるのか。それは、「忘れてほしくない」からだけではない。「同じことを繰り返させない」という未来への願いがあるからだと思う。

四月の北海道の空は、どこまでも高く、透き通っている。その空を見上げながら、私

は思っていた。この穏やかな景色も、決して当たり前ではないのだと。過去に失われた命の上に、今の静けさがあるのだと。

平和とは、ただ戦争がないことではない。誰かの記憶に耳を傾け、それを受け取り、自分の中で考え続けることだ。そして、それを次の誰かに伝えていくことだと思う。

——あまりにも空が青い日は、少しだけ怖い。

けれど今は、その青さを守りたいと、強く思う。

書 名：あの夏の日（著 者：葉 祥明）

第39回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）

平和な明日のために

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 門 虹希^{かど こうき}

焼けつくような熱線、一瞬で街を瓦礫に変えた衝撃波、そして全てを黒く塗りつぶす泥のような雨。広島・長崎の惨劇を語る言葉は数多くあるが、井伏鱒二先生の「黒い雨」が私たちの胸を衝くのは、それが単なる「あの日」の記録ではなく、原爆がいかにその後の日常をじわじわと、残酷に浸食し「続けたのか」を書き出しているからだ。本作を読み、私は「核兵器廃絶平和都市宣言」の重みと、私たちが未来に対して負うべき責任を強く再認識した。

物語の核にあたるのは、被爆した姪の矢須子の縁談を巡る叔父、閑間の苦悩である。原爆投下から数年後、平穏を取り戻したかのように見える村で、人々の関心は「誰が被爆し、誰が健康なのか」という一点に注がれる。閑間は矢須子が直接の被爆者ではなく、単に「黒い雨」を浴びたに過ぎないことを証明しようと、当時の日記を書き写し始める。しかし、その必死の試みとは裏腹に、矢須子の体は放射能に蝕まれていく。ここで描かれているのは、瞬間的な破壊への恐怖だけではない。数年、そして数十年という長い時間をかけて、人々の身体と精神、そしてささやかな幸福を破棄し続ける「終わりのない戦争」の姿である。昨日まで元気だった隣人が原因不明の体調不良に伏し、差別や偏見にさらされ、静かに希望を奪われていく。この「沈黙の恐怖」こそが原子爆弾が持つ非人道性の本質なんだと感じた。

文は驚くほど淡々としている。しかし、その静けさの中には、奪われた日常への悲しみと、それを引き裂いた核兵器への静かな怒りが満ちていた。登場人物たちが懸命に生活を営もうとする姿はとても儚く美しいが、その日常が「核兵器」に繋ぎ止められている現実に、言いようのない怒りを禁じ得ない。

ところでここで、「核兵器廃絶平和都市宣言」について考えてみる。この宣言はただのスローガンではない。これは「黒い雨」にも書かれたような苦しみを、世界の誰にも二度と味わせてはならないという、誓いである。現在、国際情勢の緊張とともに核兵器使用のリスクは高まっている。私たちは、原爆を過去の歴史として考えてはいないだろうか。矢須子が浴びた雨は、今この瞬間も、世界のどこかの空から降り注ぐ可能性があるのだ。

私がこの本をから受け取ったメッセージは「忘却に抗うこと」の重要性である。閑間が日記を書き写した行為は、失われゆく記憶を繋ぎ止め、事実を曲げさせないための戦

いであつた。私たちが平和都市の一員としてできる第一の歩みも、こうした文字や記録に触れ、かつて起きたことを自分のこととして想像し続けることにある。平和とは、単に戦争がない状態を指すのではない。誰もが健康に不安を抱かず、愛する人と縁談に語り合い、静かな夜を迎えられる。そんな「当たり前の日常」が保証されている状態こそが平和なのだ。核兵器は、その前提条件を根底から否定する。だからこそ、私たちは核廃絶を理想論で終わらせず、日常を守るための唯一の選択肢として主張し続けなければならない。

「黒い雨」を読み終えた今、私の心には一つの決意がある。物語を語り継ぐことで、核兵器の無い世界を望む声を絶やさないことだ。私たちの国が平和都市であることを誇りに思い、その理念を次世代へ広げていく責任が私たちにはある。空から降る雨が、命を脅かす黒い雨ではなく、恵みの雨であり続けるために。私たちは平和への歩みを止めることはない。

書 名：黒い雨（著 者：井伏 鱒二）

第39回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

私達から、未来へ伝え続けること

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{せいぞう}清造 ^{ここは}心花

私は、今まで戦争について様々な場面で触れてきた。そうする中で、小学校高学年になる頃、終戦のきっかけとなった「原爆」を初めて知った。そして、歳を重ねていくにつれ、多くの授業やテレビのニュースなどで戦争や原爆のことをよく知るようになり、中学生になってからは平和や戦争についてとても深く考えるようになっていた。

今回読書感想文を書くにあたり、私が読んだのは「絵本」だ。絵本は小さな子供が読む、簡単な本というイメージがあるだろう。だが、絵本は簡単なだけではなく、場面の様子を視覚的に表すことができる。そのため、小さい子供から日本語が苦手な外国人にまで言葉だけではなく戦争の悲惨さをわかりやすく伝えることができるのだ。私も戦争や原爆の題材を絵本で読むことで、その恐ろしさや人物の感情がより詳しく分かり、大きな感銘を受けた。

この本は、広島の方隊、山本さんや彼の親代わりのおじさんについて書かれている。実際に原爆が落ちた瞬間、山本さんは広島に向かう汽車に乗っている最中だった。彼が汽車からはい出たとき、彼のおじさんの店の上にはもくもくと雲が湧き上がっていた。広島への道の途中、山本さんは道端の焼けただれた人に水を飲ませたり、苦しみながら死を望む人の口や鼻を塞いで楽にしてあげるなどした。しかし、その行為は山本さんにとって地獄よりもひどいものであり、自分を「地獄の鬼」とまで思わせたのだ。この文章から私達には想像もつかない複雑な感情を読み取ることができる。そして戦争が終わり、故郷に帰る前におじさんの店を探し、その店の地下室に入った。そこでは小さな火が炎をあげていた。彼はその炎を『おじさんを焼いた原爆の火』として持ち帰り、その後も大切に大切に燃やし続けた。そしてその火は今も山本さんの故郷、福岡県の星野村で平和のしるしとして燃え続けているのだ。

私はこの絵本を読んで「原爆の火」が今も燃え続けている事と、山本さんの執念を知った。更に、その時生きていた一人一人の暮らしや人生のほとんどはこのように初めて知ること、到底分かりきることはできないのだと改めて感じた。しかし、これからずっと戦争や原爆について未来に伝えるためには、知ることを止めてはいけない。自分達ができることをしていかなければならないと大いに実感した。この本に出会ったことは、戦争に向き合うための大きな一歩に繋がった。

そして、私は山本さんの言葉や行動、強い意志に心を動かされた。山本さんは、終戦

してからたくさんの感情を持ち、戦争について考え、様々な気づきがあった。その中でも、強く私の感情を揺さぶったことが二つある。一つは原爆の火を燃やし続けたことである。これは簡単なことだと思う人もいるかもしれない。だが私は、どれだけ大切にしているにもかかわらず何かの原因で消えてしまう可能性や、火という危険なものだからこそ、消さなければいけない場面があったのだと知り、それでも消えずに、消さずに「原爆の火」と向かい合い続けた山本さんの強い意志に感動した。私も、何か一つでもいいから自分の意志を持って、大切にし続けようと思えた場面だった。

二つ目は山本さんが考えた「うらみ」というキーワードについてだ。この言葉は本の中で「ウランではいかん。うらみをはらすと、またうらまれる。うらみはうらみをうみ、戦は繰り返される。」という形で書かれている。戦争に限らず、歴史を勉強していると、この「うらみ」の連鎖には良いことが一つもない。うらんでも意味はないのだと実感する。そして、この言葉には、もう二度と戦争を繰り返さないための強い思いが込められていると感じた。この「うらみ」というものは、お互いを認め合い、みんなが思いやりを持つことでなくなる言葉だと思った。戦争もそうで、人が皆認め合う心と思いやりの精神を持つことで、絶対に起きないことだと思う。

今も戦争が続いている国や地域はたくさんある。辛い思いをしている子供達や家族を失う人もたくさんいる。誰か一人の思いやりが欠けているだけで、戦争がはじまり、こんなにもたくさんの苦しい思いをする人がいる。だから私は、被爆者の方や戦争にあった方の話を通じて、今後もずっと人の心や平和について伝えていきたい。

書 名：原爆の火（著 者：岩崎 京子 文
毛利 まさみち 絵）

第39回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（連合北海道釧路地区連合会会長賞）

戦争のない未来へ

釧路市立景雲中学校 3年 黒滝^{くろたき} 琴音^{ことね}

「作業に行くのは国のためだ。働けなくても弁当の番人ぐらいはできるから、病院に行くのは作業のない日にする。」

これは「いしぶみ」という作品にでてくる広島二中一年五学級の神名禎二くんが八月六日の朝、家を出るときに言った言葉だ。この作品は「広島二中一年生全滅の記録」という副題がつけられたノンフィクションであると知り、私は強い衝撃を受けた。神名くんがこの言葉を残した朝、広島に原爆が落とされ、たった一瞬で子どもたちの勇敢な心も夢も希望も未来もすべてを奪ったのだ。

私はこの作品を読み、懸命に生きようとした子どもたちの強さとそれを否定するような原爆の恐ろしさを感じた。作品の中にでてくる広島二中一年の子どもたちは、原爆が投下された後、全身に大きなやけどや怪我を負いながらも家族に会いたい一心で家まで歩き続けた。なんとか家族に会えた子もいれば、途中で力尽きてしまった子もいたし、残念ながら原爆によって即死した子たちもいたそうだった。けれどどの子にも共通していることは、第二次世界大戦が終戦するまで生きることではできなかったということだ。原爆は、大切な人、帰る場所、いつもの風景や笑顔さえも失わせ人々を地獄へと突き落とした。誰もがこうなるとは予想できずに、八月六日の朝、家を出たのだろう。彼らは人生を最期まで果たせなかった。令和の今、突然戦争によって命が奪われることはこの日本では考えられない。だが、もし私がその時代に生きていたらと考えると胸が苦しくなる。今の自分の人生について深く考えさせられた。

また、この本には子どもたちの日記も記載されていた。河本隼美くんの一九四四年十二月八日から四五年八月四日までの日記が載っている。四月三日には縁側で庭の花を見ながらお弁当を食べたこと、五月十四日には誕生日なのでおはぎを作ってもらったことなどが書かれていて、今の私たちとそこまで大きく変わらない中学生だったことが分かった。けれど、その日記には警戒警報が出ていたことや、戦争のための子どもたちの作業があったことなども書かれていて、私たちくらいの子供も大人たちの行動によって、自分の楽しい人生を失っていることも事実だと分かった。

私は中学三年生となり、歴史の授業で第二次世界大戦について学ぶことがあった。その授業を通して考えたことは、「日本はただの被害者ではない」ということだ。被爆した部分だけを切り取って考えれば、日本は被害者であったが、その前後の流れをみたら、

加害者の一面だってあった。そんなことを私は中学生まで知らずに生きてきたのだ。その授業を通して、原爆、そして世界平和についての考え方が大きく変わり、この読書感想文を書くにあたっても、書きながらこれから私たちはどうあるべきなのか何度も考え直すきっかけとなった。

この本を読んでいる時、今の世界、そして私たちが被爆者の方々の死を無駄にしないためにしなければいけないことは何かを考えた。それは今の日本の平和が永遠に続き、これからの世界の平和をつくるために、あの日の教訓を胸に、同じ経験を繰り返さず、行動することだと思った。そしてこれが被爆者の方々から、今の私たちに託された使命なのではないだろうか。だがしかし、テレビや新聞の報道を目にすると、世界各国で戦争が行われ、この日本においても生活に支障が出てきている。憲法を改正しようという動きがあることも知った。だから私は、世界平和、戦争、原爆などたくさんのことについて知り、たくさんの人と平和について語り合いたい。そして、この平和な日本を守り続け、平和な世界をつくるために行動する人の一人となる、そんな決意を「いしぶみ」を通して持つことができた。

書 名：いしぶみ～広島二中一年生全滅の記録～（著 者：広島テレビ放送/編）

第39回平和図書読書感想文コンクール

佳作

知る、そして平和へ

釧路市立美原中学校 3年 宝輪 優芽

「差別やいじめは無くなると思いますか？」

私がこの読書感想文を書くのに選んだ本の帯に、この文が書かれていた。これを見た時、私の中に、「なぜ原爆が差別やいじめに繋がるのか」という疑問が湧いたこの一文と自分の中に生まれた疑問の答えが気になり、中村由一さんの「ゲンバクとよばれた少年」という本を読み始めた。

一九四二年十月四日、長崎市で少年、中村由一さんは生まれた。それから約三年後。一九四五年八月九日に自宅で原子爆弾に被爆して大けがを負い、記憶を失ってしまう。その後、中村さんがどのように生きていったかが詳しく書かれている本となっている。

最初、私がこの本を読んだとき、「恐怖」という感情しか出てこなかった。この本には、原爆を落とされた時、地面の温度が三千度から四千度だったと書いてある。何を溶かせる温度なのか調べると、普通の金属や岩石はあっという間にドロドロになってしまう温度だという。人間の場合、全身が一瞬で焼失するのに近い状態になるといい、被爆した人は、自分の状況を理解する間もなく亡くなってしまう。そのような状況を、私は想像してみた。これを実際に体験したことがある人を思い浮かべるだけで、辛かった。でも読み進めていくにつれ、「恐怖」以外の感情も、自分の中に生まれているのがわかった。それは、「悲しみ」と「喪失感」だ。中村さんが幼い頃、彼を支えてくれていたのは家族だけ。他の人は自分が被爆したという理由で、ひどい差別をしてくる。苦しい思いを家族には伝えられず、本当の気持ちを言える人は、誰もいない。自分がもしそうだったらと感情移入をすると、何か大切なものが失われてしまったような、そんな気持ちになった。

この本の中に「なんでこんなにいじめられるんだ…」と小学生の中村さんが強い疑問を持つ場面が出てくる。私はこの考えに、とても共感できた。私にも似たような経験があるからだ。何もしていない自分が、大勢の人に責められる。その時、私はとても悔しかった。だから中村さんの気持ちが、痛いほど理解できた。原子爆弾に被爆したから。髪がぬけていたから。服がつぎはぎだらけだから。勉強ができなかったから。私はその理由をたくさん考えた。そして、ある一つの考えが生まれた。それは、「いじめていた人が『自分の普通』を押しつけて、中村さんのことを知ろうとも、理解しようとしなかったから。」

私は、自分の中に生まれたこの考えに、とても納得することができた。なぜなら、今の社会に起きている「いじめ」と、ほとんど変わらないからだ。相手のことを知ろうとせず、ただ一方的に自分の意見や考えを押しつける。現在も起きている「いじめ」と同じだと思った。この本を読む前に、私が疑問に思っていた「原爆が差別やいじめに繋がるのはなぜか。」この答えを「ゲンバクとよばれた少年」という本を読んで、自分なりに見つけて、考えることができた。

今、日本は平和だと思う。だから私は、戦争というものに直接出会ったことは無い。しかし、私は、日本という国に「今は戦争が無い」だけだと思っている。もしかしたら、この先世界中で大戦争が起きるかもしれない。日本がどこかの国に戦争を仕掛けるかもしれない。未来のことは、誰にも分からない。けれど、過去のことは知っている。過去にあったことから学びを得て、今の日本を、そして未来の日本を創り上げていく。そのために、私たちは過去を知る必要があると思う。日本の歴史博物館に行って、昔の日本を少し知るだけでも、図書館やインターネットで調べてみるだけでも良い。今の日本の歴史を語る講演会に参加するだけでも良い。自分から過去の日本について知ろうとすること。そこから、どうすれば同じことを二度と繰り返さないようになるか自分なりに考えてみる。そして、今の自分にできることを行ってみる。これが日本や世界が、笑顔と平和であふれる場所になるために必要なことだと、私は思う。

書 名：ゲンバクと呼ばれた少年（著 者：中村 由一）

第39回平和図書読書感想文コンクール

佳作

歴史をつなぐ

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{やまもと}山本 ^{わ か}和花

私たちは幼い頃から原爆の恐ろしさや平和の大切さについて教えられてきた。きっと、原爆を投下したアメリカのことを「悪だ」と思う人は多くいることだろう。そして、私もその一人であった。そんな時、図書館で私はこの一冊の本を見つけて手に取った。この本は原爆肯定派と否定派に分かれて討論を行っていく小説だ。そんな本を手にとった時、私は「たくさんの人が死んだのに原爆を肯定するなんてありえない」と思った。しかし、小説を読み進めていくうちに日本とアメリカのお互いにあったかもしれない強い決意や重い決断、過去にあった悲惨な出来事など、とても想像より重苦しい事実を突きつけられていった。

始めはあり得ないと思いながら私はこの小説を読み始めた。しかし、そんな中で自分の考えが根底から揺さぶられた場面があった。それは、小説の公開討論会第三回の原爆肯定派のナオミと原爆否定派のジャスミンが対決する場面だ。この対決では主に人種差別による迫害と戦争について突きつけられる。そんな中で原爆否定派のジャスミンは人種差別の苦しく辛い過去について述べていく。そんなジャスミンの人種差別に対しての討論のなかで印象に残った言葉がある。それはジャスミンの「アイルランド系の白人が日系人を差別し排斥してきた歴史と、原爆投下は、同じひとつの根から伸びてきたものなのです。」という言葉だ。この言葉を聞いて私は一瞬、思考を停止してしまった。それは、私は今まで原爆投下について他の出来事と結びつけて考えようとせず、原爆投下の事実に対し単体の出来事として考えていたからだ。この事実を思い出すたび、私は「なんで自分はこんな狭いものの見方しかせず、歴史を学ぼうともしないで原爆を悪だといいきっていたのだろう」と自分の考えの狭さに呆れ、恥ずかしくなった。著者の小手鞠さんの父親は、原爆ではないが岡山空襲の被害者だ。岡山空襲はアメリカ軍の爆撃機による無差別爆撃で、岡山市の六十三%が消失、千七百人以上の市民が犠牲になった。そう言った悲惨な過去を持つ岡山は平和都市宣言を行い、核兵器廃絶を掲げている。そんなアメリカとの戦争の被害者とも言える小手鞠さんが原爆を肯定するようなことを書くことが出来るのはなぜだろう。小手鞠さんはあとがきにこのようなことを書き残している。「小鳥のように軽ければ、羽ばたいて、世界中へ飛んでいける。一冊の本には、そんな力がある。」ということ。きっとこの言葉はアメリカとの戦争の被害者である父親を持つ小手鞠さんが知る、原爆投下だけが原爆の全てではないという事実をもっと

たくさんの世界中の人々に知ってほしいという意思の表れなのだろう。また、この小説は自分たちの過去の歴史を認めたり否定し合っていきながら進んでいく公正で物語が書かれている。きっとこの文章をこの構成にしたのは白川さんの「一つの視点だけでなく、さまざまな物事を捉えて、過去の過ちを認め、繰り返さないようにして欲しい」という願いの表れなのだろう。この本に込められた白川さんの願いがたくさんの人に届けられ、多くの人に原爆の事実を知ってもらいたいと思う。そして、この本を通して学んだことを活かして、自分自身にできることを見つけることが出来ると信じたい。

「原爆について知っているか」と聞かれたら、私は「いいえ」と答えるだろう。それは、原爆投下の事実についての表面しか私は見る事が出来ていなかったからだ。しかし、原爆についてだけでなく物事に対しての双方からの見方についても教えてくれたこの本に出会えたことは私にとってとても大きな意味があったと思う。

原爆の事実を知って、「仕方なかった」と思う人も出てくるかもしれない。確かに、私も原爆投下については「仕方なかった」と思う部分もある。しかし、多くの人が原爆で亡くなってしまったことは変えられない事実だ。でも、私たちの力でこれからを変えていくことはできる。いつか、私たちの力で原爆がない世界が訪れることを私は願っている。

書 名：ある晴れた夏の朝（著 者：小手鞠 るい）

第39回平和図書読書感想文コンクール

佳作

原爆詩を読んで思うこと

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{たかおか}高岡 くるみ

私はこれまで日本の戦争に関わる本、映像や情報を避けていました。社会科の授業で学習した広島と長崎に落とされた原爆、あんな恐ろしいことをした人がいて、された人がいるということを私の中で受け止めることが出来なかったからです。私たちと同じ人間がなぜあんなことをしたのか。できたのか。八十年前の日本で起こったことが現代を生きている私には信じられませんでした。

『ヒロシマの風—伝えたい。原爆のこと—』には、いくつもの原爆詩が載っています。

峠三吉さんの『序』という詩には、「ちちをかえせ。ははをかえせ。としよりをかえせ。こどもをかえせ。わたしをかえせ。」と書かれています。たくさんの方が家族や知り合いを亡くしました。その中で生き残れたことがよかったのか。と考えさせられました。生き残った自分は、以前の自分とは違う人間になってしまい、恐怖、不安、怒り、悲しみ、苦しみなどの様々な感情の中で生き続けなければなりません。私達が美しいと思う夕日に染まった赤い空を見て、あの日が思い出されるという被爆者の方がいるという記事も読みました。何度も何度も見る夕やけ空を見ることで、あの地獄のようなおぞましい光景がよみがえってしまうなんてどんなに苦しい日々でしょうか。あの日の記憶を忘れたくても忘れられず生きていくことはどれほど辛く苦しいことなのでしょうか。

森下弘さんの『ヒロシマ』という詩にはこう書かれています。「あなたの目で確かに見つめなさい。片目で見ないで。腕や頭で見ないで。絶望に耐えている者の心で。」と。日本側から。アメリカ側から。政府側から。国民側から。大人、子ども。男性、女性。色々な立場で考えて戦争が起こってしまったのでしょうか。地球上にはたくさんの方がいて、たくさんのおもいや考えがあります。どれが正しくて、どれが間違えなのか簡単に結論の出ないこともあると思います。みんなが自分の立場からだけではなく、相手の立場に立ったり、弱いものの立場から物事を考えることができたなら、力まかせに物事を解決しようとするのではなく、話し合い、分かり合えることも出てくるのではないかと私は思います。

原爆経験者の方がなぜあの思い出したくない辛い日々をこうして詩にしたり、語り伝えてくれているのか。それは、世界で唯一原爆投下された日本の広島や長崎がどれほどひどい光景でどれほどの悲しみに包まれたのか。こんなひどいことが世界のどこにももう二度と起こってはならないと知ってもらうためだと思います。どんなに恐ろしいこと

であっても避けずにしっかりと学び、考えなければなりません。私達人間は、話すことができます。思いやることができます。間違いを認め、正すこともできます。争いを起こすのは簡単ですが終わらせるのは難しいです。どうすれば「平和」を保っていくことができるのか。一人一人がもっと「平和」について考え、話し合う機会を作ること。そして、原爆の影響について若い世代の私達がよく理解し、語り継いでいくことが大切だと私は思いました。

書 名：ヒロシマの風 伝えたい、原爆のこと（著 者：吉永 小百合）

第39回平和図書読書感想文コンクール
佳作

8時15分の懐中時計

釧路市立幣舞中学校 2年 ^{あさくら}朝倉 ^{なな}奈々

「8時15分 ヒロシマで生きぬいて許す心」。私が読んだ本の題名です。本を読む前、私は「ヒロシマで生き抜いて許す心」の言葉の意味がわかりませんでした。被爆者である人がなぜ、「許す」という選択をしたのかがわからなかったからです。

この物語は、著者である、美甘章子（みかもあきこ）さんの父、美甘進示（みかもしんじ）さんの視点で語られています。被爆した当時16歳の美甘進示さんが、彼の父の手によって燃え盛る家から救い出されるところから物語は始まります。大火傷からくる激痛から生き延びた進示さんを襲ったのは、原爆を落とし、家族を奪ったアメリカへの深い憎しみでした。しかし、亡き父の教えと無償の愛に導かれ、彼は憎しみの連鎖を断つため「許す」ことを決断します。

私がこの物語で特に印象に残った場面は、進示さんの父の懐中時計を見つける場面と、その懐中時計が盗まれてしまった時に、進示さんが章子さんに言い聞かせる場面です。進示さんが火傷の治療のため入院していた病院を退院し、家で見つけた懐中時計でした。その懐中時計は進示さんの父が長年使い続けた懐中時計でした。「想像を絶する光熱は瞬間的に摂氏数千度にも達し、針の影を時計の文字盤に焼き付けていた」。私はこの文章を読んだ時、原爆の熱は影をも焼き付けることができるのかと、すごく驚きました。さらに私は、文字盤に焼き付けられた針の影が永遠に8時15分を示し続けるように、進示さんに限らず、すべての被爆者の心も懐中時計のように、8時15分で止まったままなのではないかと思いました。

数年後、この懐中時計は国連の原爆四十周年記念の永久展示コーナーに贈られました。ですが、現在は盗難にあい、懐中時計を見ることはできなくなっていました。その時、章子さんは盗難に対して、国連が何の対応もしないことに腹を立てていました。けれど、進示さんは、章子さんに対し「何かをなくしたときは、何かを得る時だ」と言い聞かせました。この場面こそが私が特に印象に残った二つ目の場面です。この本の最後にある、あとがきには、章子さん視点でこの場面が綴られていました。そこには、「懐中時計はただの所有物であり、歴史や絆が消えるわけではない。瓦礫の中から、個の懐中時計を見つけ出せた跡に感謝する。」ということが書かれてありました。

それではなぜ、進示さんや章子さんが「許す」という道を選らんだのか。私が抱いた疑問でした。この本を読み終わった今、私は「許す」より、今があることに「感謝」を

しているのではないのかなと思いました。懐中時計が紛失したときも、国連に対して「許す」という部分もあったとは思いますが、それよりも、「懐中時計を見つけ出せた奇跡に感謝」という部分の方が大きいと思ったからです。

広島と長崎に原爆が落とされ、その重大さを世界が認知したからこそ、どこの国も原爆を使わないのであれば、今の生活に感謝すべきだと改めて思いました。それと、今回の本を読んだことで、原爆について、もっと理解を深めたいと思うことが出来ました。

「8時15分 ヒロシマで生き抜いて許す心。」私が読んだ本の題名です。「8時15分に何があったのか」。このことを忘れることなく、過ごしていきたいと思いました。

書 名：8時15分 ヒロシマで生きぬいて許す心（著 者：美甘 章子）

第39回平和図書読書感想文コンクール

佳作

「平和の文化」を想像する

釧路市立阿寒中学校 3年 ^{しばき}柴木 ^{ここね}心音

私がこの本を読んで印象に残ったところは著者のスティーブン・リーパーさんが言っていた、アメリカと日本で教えられる「原爆の歴史」に大きな差があるという場面です。

私は今まで、戦争や原爆の話を聞かたびに「かわいそう」「怖い」という感想しか持っていませんでした。日本で暮らしている自分は安全で、それ以外の感想を持つことなんてあり得ないと思い込んでいたからです。でも、この本を読んで、その当たり前だと思っていた感覚が、ただの「思い込み」だったのかもしれないと気付いて、心の中がざわつきました。

スティーブン・リーパーさんは、アメリカでは原爆が「多くの命を救ったヒーロー」みたいに教えられていると書いています。それを知った時、私はただ「ひどい」と思う前に鳥肌が立ちました。なぜなら、もし私がアメリカで生まれて、その話を信じて育っていたら、私もキノコ雲を見て「やったー!」と喜んでいただろうからです。

同じキノコ雲を見ても、片方は「地獄」を見ていて、もう片方は「平和」を見て喜んでいる。これは、どちらかが間違っているという話ではなく、「最初から同じものが見えていない」ということなんだと気付きました。同じ人間なのに、見ているものがここまでバラバラなんだと思うと、胸が苦しくなりました。

この「見えているものの違い」があることを知らないまま、まだ「平和が一番だ」といっていても本当の解決にはつながらない気がしました。そう思うと、今まで自分達が信じていた「平和」という言葉が急に不安になりました。著者のスティーブン・リーパーさんは、これを乗り越えるために「平和の文化」が必要だと言っていて、それは、ただ争わないことではなく、相手のことを想像しようとする事なんだと思います。

「相手を想像する」というのは、口では簡単だけど、実際にはとても難しいことだと思いました。なぜなら、自分にとっての「当たり前」を一度捨てなければならないからです。

この本の中で、スティーブン・リーパーさんは「自分たちの正義だけを信じていると、相手は悪に見えてしまう」というようなことを言っています。私はそれを読んで、自分と全く違う考えを持つ人、例えば原爆を「正義」だと教わってきたアメリカの人たちを、ただ「間違っている」と切り捨てるのではなく、「なぜそう思うようになったのか」を想像してみようと思いました。

自分と真逆の意見を持つ人をすぐに受け入れることは、今の私にはまだ難しいと思いますが、それでも「あっちが間違っている」と決めつける前に、一度考えて「相手にはどんなことが見えているんだろう」と考えてみる。それがスティーブン・リーパーさんのいう「平和の文化」とつながるのだと信じています。

この本を読み終えて、私の心に残ったのは、キノコ雲の怖さだけでなく、それをどう見るかという「心」でした。平和とは、自分とは違う視点を持つ相手を想像し続けることで、つくれるものだと感じました。

私はこれから、学校生活などの中で、自分の意見を大切にしながらも、相手の考えていることを想像していきたいなと思いました。

書 名：アメリカ人が伝えるヒロシマ（著 者：スティーブン・リーパー）

第39回平和図書読書感想文コンクール

佳作

人の救い方

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{おかぼやし}岡 林 ^{よし か}圭花

私が図書館に行った時、一冊の本に目が止まりました。その本の題名は、「光のうつしえ 広島 ヒロシマ 広島」です。なぜ「光のうつしえ 広島」ではなく、「光のうつしえ 広島 ヒロシマ 広島」なのだろうか。同じ読み方をする三つの「ひろしま」には、どの様な違いがあるのだろうか。そう考えた私は強く興味を惹かれ、気がつくとその本を手にとっていました。

私がこの「光のうつしえ」を読んで特に心に残ったのは、美術部の文化祭のテーマである『あのころの広島とヒロシマ』を通して、登場人物たちが人の思いに気づいていく場面です。この物語には、希未、俊、耕造の三人が主な登場人物として登場します。三人はそれぞれ、家族や身近な人から原爆が投下された当時のことや、被爆した人の今の思いを聞いていきます。そこには、後悔や孤独、苦しみ、恐怖など、言葉にしきれないほど多くの思いがありました。

私は、被爆体験者の話を直接聞いたことがありませんし、広島にある原爆ドームを訪れたこともありません。原爆が投下されたという事実を知っていても、原爆から生き残った人の気持ちを本当の意味で考えることはできていませんでした。正直に言えば、当時のことを知るのには少し怖く、その人たちの思いを受け止める自信がなかったのです。けれども、希未たちは自ら進んで被爆した人の話を聞き、その人の思いを知ろうとします。その姿は、私にはとてもまぶしく、輝いて見えました。

この作品の中で特に印象的だったのは、三人が「被爆した人たちを救うために必要なこと」に気づいていく場面です。物語のはじめで、希未と俊は吉岡先生が入市被曝をしていたこと、そして大切な人である聡子さんを亡くしていたことを知ります。その出来事を通して、「よく知っていると思っている人のことでも実は知らないことが多い」という事実に気づきます。そして、被爆者の話を聞きながら、文化祭に出す美術部の作品『あのころの広島とヒロシマ』を制作していきます。

被爆者から話を聞く中で、新聞や手紙、口頭など、さまざまな形で短歌が登場します。三人は多くの人の体験を知るうちに、悲惨な状況を生き抜いてきた人たちが生きていくためには、ほんの小さなきっかけや救いが必要なのではないか、ということに気づいていきます。短歌や、誰かが分けてくれた食べ物など、どんな小さなことでも、それがあつて救われる人がいるのです。短歌であれば、詠んだ人と読んだ人

の思いが重なり合い、さまざまな感情を共有することができます。そのことで、人は励まされ前を向く力をもらえるのだと、私もこの本を通して気づかされました。

私は絵画教室に通い、絵をかいています。コンクールに出品し、賞を取ったこともあります。絵を描くことは好きですが、自分の絵が誰かを救ったり、心に残ったりするものになってほしいと考えたことはありませんでした。今までの私は、誰かの思いを描こうとするのではなく、ただ「うまく描くこと」だけを目標にしてきたように思います。

確かに、私自身も気持ちが落ち込んだときに、音楽を聴いて元気をもらい、助けられたことがあります。それでも、自分が誰かを救う側になれるとは考えていませんでした。しかし、「光のうつしえ」を読んで、どんなに小さなことでも人は救われるし、人を救うことができるのだと知りました。そして、私の絵でも、もしかしたら誰かの心を少し軽くすることができるかもしれないと思うようになりました。

それは絵だけに限らないと思います。学校生活の中で、少し行動を変えるだけでもいい。誰かのためになると思ったことを積極的に行い、少し声をかけるだけでも、救われる人はいるのかもしれない。私は、誰かを救える人になりたいと思いました。今までたくさんの人に救われてきたからこそ、今度は自分が救う側になりたいです。

書 名：光のうつしえ（著 者：朽木 祥）

第25回平和の主張コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

当たり前でつくる未来

北海道釧路湖陵高等学校 3年 ^{あおと}青戸 ^{めい}愛唯

国連サミットで採択されたSDGsには「誰一人取り残さない」持続可能な社会を実現するための国際目標が掲げられていて、十六番には「平和と公正をすべての人に」とあります。この目標は、二〇三〇年までに達成されるべきとされていて、刻一刻とタイムリミットが迫っています。しかしながら、今、この瞬間にも、世界のどこかで争いが起きてしまっているという現状にあります。誰もが「平和な日常が一番心地よい」と思っているに違いないはずなのに、こうした課題を広く示さなければ、安心して暮らせる未来が実現できないのは、とても悲しいことだと思います。

私は、学校の探求の授業で友人とチームを組み「平和のためにできること」について考え、取り組んでいます。たくさんの人々に戦争のことを意識してもらおうと、どんな世代の人にも理解してもらえるようなゲームやイベントの開発を行っています。その過程で、たくさんの方々と関わることができました。いつも活動を近くで優しく見守り手助けをしてくれる学校の先生方や、戦争に関する意識調査を快く引き受けてくださった中学校の先生方・生徒の皆さん、平和や戦争についてのご意見を聞かせてくださった鶴間市長、鈴木議員、様々な方々に助けられ、活動できています。このように温かい人ばかりの今の釧路は、平和であると感じています。そして「平和と公正をすべての人に」というゴールに辿り着くためには、見えるものだけでなく見えない歴史や想いをよく知り、人は優しく思い合うことが大切だと、改めて強く感じました。

私は、今、とても幸せです。友人がいて、家族がいて、美味しいご飯が食べられて…。時には、物事が自分の思うように進まないこともあります。そんなことは、ちっぽけな悩みなのだと思います。困難や失敗を経験して、成長できるからこそ、本当の幸せなのかもしれません。なぜなら、この世界には、戦争だけでなく、食料困難や貧困、学校にも病院にも行けない子どもがたくさんいるなど未だ解決されていない課題が山積みだからです。実際に、世界では、十人に一人、約七億を超える人々が極度の貧困の中で過ごしているそうです。これは、発展途上国に限った話ではありません。先進国でも、三〇〇〇万人の子供たちが、貧しい暮らしをしています。

この世界に生まれてきた全ての人は幸せになる権利があります。全世界の人々が助け合い、全ての人が幸せで心が満たされた毎日を過ごせたら良いなと思います。その目標実現のための第一歩として、私たちの行動から変えていくべきだと感じています。ま

ずは、過去を学び、今を知り、考えることが大切です。ニュースや新聞を見て感じたことを「見る」だけで終わらせず、それをきっかけとして、一人ひとりが何かを「考え」、想いを周りの人と「共有する」のです。この輪が広がれば、より多くの人々に、平凡に過ごしている毎日の大切さを分かってもらえenと思います。そして、その小さな行動の積み重ねが「当たり前」を守ることにも繋がると感じています。

第25回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）

友の生きる戦争によせて

北海道釧路湖陵高等学校 3年 おかばやし 岡 林 はる か 春花

突然だが、あなたは、ロシアのウクライナ侵攻が今どういう状況にあるかお分かりだろうか。アメリカとイランの対立は記憶に新しいだろうが、前者に関しては、名前を聞いて初めて、そういえばそんなのもあったな、くらいに感じている人も多いのではないと思う。私も、ずっとそうだった。戦争のニュースを目にしても現実味がなく、心の中で人知れず、戦争ってよくないよな、と思ったり、なんとなく犠牲者に同情したりして、あたかも世界平和に貢献したかのような気分になっているだけだった。しかし、高校二年生の冬、留学先での体験が、私を変えた。

私は、昨年末、約二ヶ月間カナダに留学していた。現地の高校に通うなかで、同じ授業を選択していた、ソフィアという少女と仲良くなった。会話を重ねるうちに、彼女がウクライナ出身だと聞いて、私はふと、ロシアのウクライナ侵攻のことを思い出した。私は、（あれ、ロシアとウクライナってまだ戦争してたっけ。停戦したんだっけ）などと思案した。日本ではしばらく話題にされていなかったため、近況を知らず、存在自体も忘れかけていたのである。一方で、当のソフィアはゲームの話などを楽しそうにしていたので、水を差すのも無粋かと思い、このことは話題にせず、そのうちまた忘れてしまった。

私の帰国が間近となったある日、美術の授業で先生とソフィア、私の三人が話しながら作業していると、それぞれの出身国のことが話題に上った。話の流れで、先生がウクライナ情勢について言及したその時、ソフィアはふと顔に影を落とし、こう言った。

「ウクライナに帰りたい。友達と飼い猫に会いたい。」

でも、とソフィアは続けて言う。

「ウクライナに帰ればお父さんが徴兵されてしまう。」

この言葉を聞いて、私は衝撃を受けた。ウクライナ情勢は数年前にニュースで見聞きして、なんとなく理解しているつもりだった。故郷を追われたり、徴兵されて家族と離れ離れになってしまったりした人たちに同情すらしていた。しかし、実際に当事者と向き合って、さんざん報道で見聞きしてきたはずの彼らの想いを、改めて直接聞いたときに、私は、今までずっと、この戦争を「外」から見ていたのだと分からされた。なんか大変そう、かわいそう、助けてあげなくちゃ——そういう視点で見てきたのだと。

この体験を通して、私は、世界平和を考えるには、当事者意識が重要だと感じた。国際問題は、世界中の各個人がそれを自分ごととして捉えて解釈し、「内」に入り込まな

ければ、根本的解決には至らない。表面的な理解に留まっていれば、どんな支援も対症療法にしかないし、長続きしないだろう。だというのに、世の中の大半の人々は、かつての私と同じように、ニュースから簡略化された情報を得て、世論というフィルターを通し、「外」から世界の戦争や対立を見ている。そして、このことを自覚している人のなんと少ないことか。

私は、当事者と実際に対面することで、自分の当事者意識の欠如に気づくこととなった。しかし、誰もが同じような体験をできるわけではない。かといって、いきなり当事者と同じ気持ちになれと言われても、そう簡単にはいかないだろう。だから、まずは自ら情報を集めることから始めるべきだ。多角的な視点から情報を集めれば、報道機関の指針に関わらず、事実をより正確に知ることができる。その上で、その環境に置かれた自分の姿を想像してみよう。単純な同情だけでなく、心の奥底から当事者の想いを感じることができるのではないだろうか。

世界平和と聞くと、その規模の大きさに圧倒され、一步身を引いてしまいたくなる。しかし、世界中の一人ひとりが、当事者意識とそれをもとにした自分の意志を持って行動すれば、個人の小さな力が集まって大きな力となり、平和を達成することができると、私は信じている。

第25回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

戦争と平和について

北海道釧路工業高等学校 2年 ^{はしうら}橋浦 ^{あゆむ}歩夢

日本は、昭和、平成、令和と元号が変わっていき、昭和は今年で101年となる。昭和前期は第一次世界大戦、第二次世界大戦による戦争で、東京大空襲では約10万人の命が奪われ、広島・長崎原爆では約21万人が亡くなったとされている。数多くの命が奪われた第二次世界大戦の終戦から今年で81年となる。その終戦後の日本はなぜ平和国家になったのか、どのような変化があったのかを考察していく。

第二次世界大戦の終戦後、日本は歴史的な大転換を迎えることになった。第二次世界大戦の敗戦によって、日本はそれまでの軍国主義体制を終え、まったく新しい国家として再出発することになったのである。まず、日本は連合国の占領下に置かれ、特に連合国軍総司令部の指導のもとで大規模な改革が進められた。最高司令官であるダグラス・マッカーサーは、日本を再び戦争を行わない国にするため、軍隊の解体や民主化政策を実施した。これにより、言論の自由や女性の参政権が認められ、国民一人ひとりの権利が尊重される社会へと変化していった。また、農地改革や財閥解体によって経済の仕組みも大きく見直され、より平等な社会の実現が目指された。こうした改革の中でも特に重要なのが、1947年に施行された日本国憲法である。この憲法は、主権が国民にあることを明確にし、基本的人権の尊重を柱としている。また、第9条において戦争を放棄し、武力による解決を否定した点は、世界的にも非常に特徴的である。この平和主義の理念は、戦後日本のあり方を象徴するものとなった。

一方で、戦後直後の日本経済は深刻な混乱に直面していた。物資不足やインフレーションが続き、人々の生活は非常に苦しいものであった。しかし、1950年に始まった朝鮮戦争をきっかけに状況は大きく変わる。アメリカからの軍需注文、いわゆる特需によって日本の産業は活性化し、経済は急速に回復していった。この流れはやがて高度経済成長へとつながり、日本は世界有数の経済大国へと発展していくことになる。さらに、1951年のサンフランシスコ平和条約の締結により、日本は国際社会への復帰を果たした。翌1952年には占領が終了し、主権国家としての地位を取り戻した。同時にアメリカとの安全保障体制も築かれ、日本は国際社会の中で独自の立場を確立していった。

このように、戦後の日本は政治・経済・社会のあらゆる面で大きな変化を経験しながら、平和国家として再出発したのである。その過程は決して容易なものではなかったが、改革と努力を重ねることで現在の日本の基盤が築かれたと言える。戦争の反省を踏まえ、

平和と民主主義を大切にしてきた歩みは、これからの時代においても重要な意味を持ち続けるだろう。そして、この日本で戦争があったこと、空爆により奪われた命、焼け野原になり食料や水も少なくなっていた時代、その時代を乗り越えたからこそ今があることを忘れてはならない。また、日本が作り上げた平和国家を壊してもならない。現代を生きる人が語り継ぎ、後世へと語り継がれる。

第25回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市連合町内会会長賞）

戦争と平和について

北海道釧路工業高等学校 2年 きもと はると
木元 悠斗

戦争とは、一言で言うと分岐点である。なぜ私がそう考えたのかと思った人が多いと思います。1939年第二次世界大戦のとき世界は甚大な被害を受けましたが、戦時中、戦後日本やアメリカなどを含めた国は急激に技術が進歩しました。それがわかるのは日本が戦後10年ほどたった時、日本は東京オリンピックを開催することができたのです。戦時中日本は空爆、原爆、そして人的被害をうけたにも関わらず日本はオリンピックを開催できたのです。ゲームで例えると自分が作った大きな家を他プレイヤーに荒らされたが10分程度でまた立て直すようなものです。戦争によって失ったものもたくさんありますが、その分世界は未来に進むことが出来たのだと思います。しかし、この「進歩」は決して自動的に起きたわけではありません。焼け野原に立った人々が、失ったものの大きさに絶望しながらも、二度と同じ過ちを繰り返さない、子供たちには豊かな未来をとという強い意志を持って選択を変えたからこそ、分岐点の先が明るいものになったのです。

私たちが今享受している便利な技術や平和な日常は、かつての分岐点での犠牲と努力の上に成り立っています。だとすれば、次に私たちが直面する分岐点において、破壊を通さずとも未来へ進める道を選び取ることこそが、歴史から学ぶ真の意味なのではないでしょうか。歴史を振り返れば、戦争という悲劇が技術や歴史の加速装置となった事実は否定できません。しかし、ここで私たちが真に問い直すべきは、その加速の代償として支払われたものの重さです。失われた数えきれない命、断絶された文化、そして癒えることのない心の傷。それらは決して「進歩のための必要経費」などと片付けられるものではありません。技術がどれほど高みに到達しようとも、失われた一人の人生を買い戻すことは不可能なのです。

私たちが今、手にしているスマートフォンや、世界中を数時間で結ぶ航空機、そして病を克服する医学の多くが、かつての戦火から派生した技術に基づいているというのは、残酷な皮肉かもしれません。しかし、それこそが現代を生きる私たちに課せられた「責任」ではないでしょうか。先人たちが絶望の淵から這い上がり、血の滲むような努力で築き上げたこの「平和な分岐点」を、ただ享受するだけで終わらせてはならないのです。ゲームの世界であれば、拠点を破壊されてもリセットボタン一つでやり直せるかもしれませんが。しかし現実とは違います。一度壊れた絆や命は、二度と同じ形には戻りません。

戦後の日本が驚異的な復興を遂げ、わずかな期間でオリンピックを開催できたのは、単に技術があったからではなく、「破壊による進歩」という悲しいサイクルを、自分たちの代で終わらせようとした強い願いがあったからに他なりません。今、世界は再び大きな分岐点に立たされているように感じます。環境問題、急速に発展する AI 技術、そして絶えない国際紛争。これらの課題を乗り越え、さらなる未来へ進むために、もはや「争い」という旧時代のブーストは必要ありません。破壊を経験しなければ進化できないという呪縛から解き放たれ、対話と共創によって新たな家を建てていく。それこそが、過去の犠牲に対する唯一の報いであり、私たちが歴史という教科書から学び取るべき、最も価値ある答えなのです。「戦争が世界を変えた」という過去の事実を認めつつも、これからは「平和が世界をさらに良くする」という新しい物語を書き加えなければなりません。私たちが選ぶ次の一歩が、未来の子供たちにとって、破壊を通さずともたどり着けた「光り輝く分岐点」となることを、強く願って止みません。

第25回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和

北海道釧路工業高等学校 2年 関 嶺太^{せき れいた}

私は戦争が常に人々をおびやかしていると考えている。まずは、ウクライナとロシアの戦争を例にすると、ロシアは2022年2月24日にウクライナに侵攻を始め、今もまだその戦争はつづいている。ロシアによるウクライナ侵略を受けて、G7を含む先進国が様々な経済政策を迅速に行なってきた。しかしウクライナがロシアに侵攻を受けたことによって、エネルギー資源の主要な輸出国としてのウクライナがダメージを受け、世界各国の金融市場と商品市場の物価問題に大きく影響を及ぼしている。またこのような戦争では過度なインフレを引き起こし世界経済に大きな影響を及ぼす。自分たちのいる日本も例外ではなく、物価の上昇や税金問題で国民の不満の声が上がっている。今までだったら簡単に手に入っていたものが入手しづらくなっていたり、手が出せない価格になってしまうこともないとは言い切れない。このことから仮に私たちの国ではなくとも戦争が起こってしまえば一気に経済に大きく影響し、私たちの国にまで影響を及ぼすことになる。

2つ目は戦争をすることでたくさんの人たちの未来を奪ってしまうということだ。戦争が始まった時点でまずその国の兵士たちが出兵する。その兵士たちにも家族や恋人がいるはずなのだ。SNSやニュースで毎日戦争の話でもちきりだが、誰一人として他人事のように捉えていると私は感じている。SNSでは、「これから世界はどうなるんだ」や「世界大戦が始まる」など、戦争の恐ろしさや、戦争が招く影響を理解せずSNSという安全圏で物を語っている輩が多く、今色んなところで戦争が起こっていることを再確認してほしいと感じている。そして、他人事のように捉えていてはいざ自分の国に戦争の火種が落ちてきたとき、安全圏から物を言って他人事のように捉えてきた人々は、その時になって事の重大さに気づく。それでは自分たちの未来も家族の未来も失ってしまうと考えている。現にアメリカでは核シェルターの普及率が82%を超えていて、日本はまだ10%にも満たない。このことからアメリカなどの先進国はいつ起こるかわからない戦争のために、準備を怠っていないということだ。アメリカや中国、イギリス・フランス、イスラエルなど戦争を身近に感じている国には核シェルターがあり、日本のようにまだ少ししか戦争の影響が及んでいない国にはシェルターが普及していない。自分たちの未来を守るためにも今一度今世界で起こっている状況について考えることが重要だと感じた。

これから、自分たちの国を巻き込んでの戦争が始まるかもしれない。そして今少しずつ影響も出ているこの状況に、流れている戦争についてのニュースを今一度確認してほしいと私は感じた。そして、早く戦争が終わり、戦争の恐怖に気を配ることのない平和な時間が訪れることを心から願っている。

第25回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和

北海道釧路工業高等学校 2年 ^{たかざわ}高沢 ^{ひかる}光輝

戦争はそんなに悪いことなのか。自分は戦争が悪いことだと思っていた。それもそうだと思う。戦争が起こると、特定の資源の流通が滞る事がある。例えば、今の現状では石油の資源が高騰している。それは資源が徐々に無くなってきてるせいもあるだろうが、戦争による資源の流通が停滞し資源の高騰につながる。他にも大勢の人が亡くなることだ、戦争が起きると必ずと言っていいほど大勢の人が亡くなる。確かに戦争なのだから勝つために人を殺してでも勝たなければいけないと言うのもわかる。そもそも話し合いで解決できるのであれば戦争は起きていないと思う。他にも、1945年8月頃、ソ連により日本人などが拘留され強制労働を強要させ、人権を侵害することが問題だった。戦争に負けた国、敗戦国は長期的な国際的孤立があり、自国で財政をなんとかしなければいけないなど問題がある。この他にも戦争にはデメリットはある。

全体的に見たときに戦争は悪となってしまうが戦争を行った国はどうだろうか、もちろんデメリットはある、だがメリットも少なからずある。例えば戦争が起こることによる短期的な経済・産業の発展だ。何故か。戦争が起こると武器などの需要が上がり、それによる関連事業による株価上昇が起こり、その国の関連事業や他国の関連事業にメリットになる。他にも団結力が生まれることもメリットだと思う。明確な敵が存在することで国内での意見の団結、これが国をより一層強くすると考える。他にも敵対国から豊富な資源を得られることがメリットである。足りないものを豊富にするために戦争をし、自国のメリットになるように仕掛けるのもまた一つの考え方と思える。

ここまで戦争のメリット・デメリットを挙げていった。メリットも確かにあるがデメリットのほうが大きく、やはり戦争は悪なのか。だが正直そんなものは関係ないし、そこを見て戦争を善としたところで世界が平和になるわけでもない。戦争を行うとなくなるものが必ずしもあるという事が重要だ。今は戦争でなくなるものより他に無くなるものがあることに注目することが大事だと思う。それは環境だと思う。今、地球温暖化による自然破壊などが問題である。急激に温度が上がることによってその温度に適さない動植物が消失してしまい資源が無くなってしまう。それが続くと人はどう生きていくのか、確かにその地でしか取れない資源もあるだろうが今の現状がある中で戦争を行っている暇なんてあるのだろうか。もっと別の方法があるのではないか、自分はそう考える。

自分の最初に思った「戦争は悪なのか」これはよく考えてみると関係なかったのかも

しれない。今は戦争より気にすることがある中で世界中の国が戦争を止めるなんてことはゼロかもしれない。それでも少しずつ戦争をなくして世界中の国が協力をし、今ある現状に取り掛かることで各国の仲が深まり、足りないものをお互いに補い合えるようになればより良く平和な世界が創れると考えた。

第25回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和について

北海道釧路工業高等学校 2年 こばやし ひなた
小林 日向

私は、戦争をなくすこと、及び争いのない平和を実現するのは、現時点では不可能であると思う。

まず、戦争が起きる主な要因を簡単にまとめると、「民族・宗教・領土・経済・資源・思想・政策」の7つである。そして、現在起こっている戦争を今挙げた要因に当てはめていくと、ウクライナ侵攻は「領土・思想・政策」、イスラエル・パレスチナ問題含む中東情勢は「民族・宗教・領土・思想・政策」が当てはまる。まず最初に、戦争と経済の関係を中心に考えるとして、現在進行系で起こっている、ホルムズ海峡封鎖を例に挙げると、イランによるホルムズ海峡封鎖によって、日本・韓国・フィリピン等の、石油・ガス等を輸入しているアジア諸国やヨーロッパ諸国、クウェート・サウジアラビア等といった、石油・ガス等を輸出をしている中東諸国に経済面・物流面多大な影響を与えている。歴史的に見ると、第一次世界大戦後、敗戦したドイツは連合国によって多額の賠償金を課せられ、その影響で当時ドイツの通貨であった金マルクの価値が大幅に下がったり、失業者が大幅に増加した。つまり、戦争によって経済が崩壊したのである。さらに、第二次世界大戦が起こったそもそもの原因は1929年のアメリカ・ニューヨークの株式市場の株価大暴落から始まった、世界恐慌である。つまり、経済不況によって戦争が始まったのである。まとめると、戦争と経済の関係は、「戦争のせいで経済不況が起こり、経済不況のせいで戦争が起きる」というものであると考える。しかし、戦争のせいで経済不況になった国が存在する一方、戦争のおかげで経済が発展した国も存在する。戦争終結直後の日本とドイツでは、戦時中での空爆等による被害によって経済・産業が落ち込んでいたが、1950年に勃発した朝鮮戦争で日本はアメリカから大量の物資の注文を受け、ドイツ（西ドイツ）は輸出を伸ばしたことによって、好景気（朝鮮特需）となり、今後の高度経済成長の足がかりとなった。また、アメリカも第一次世界大戦時、主戦場であったヨーロッパに物資を大量に輸出したことで、好景気になった。

平和、つまり戦争をしていない状態であったとしても、世界経済が一生安定しない限り、戦争が起こる可能性は少なからず存在し続けると私は思う。もし仮に、経済が一生安定するようになったとしても、他にも民族、宗教、領土、資源、思想、政策といった問題が残っている。次に、領土問題をなくすとしたら、まず国境をなくすか、国同士で連合を作るかといった選択肢があるが、思想（資本主義、社会主義、ファシズム等）が

異なるといずれ国内・国同士で連携した政策を取ることができず、内部分裂を起こしてしまう。例を挙げれば、第二次世界大戦時の連合国で、アメリカ・イギリス・フランスとソ連は、最初は共通の敵国である枢軸国陣営を倒すため、あらゆる面で連携していたが、戦争が終結した途端、次第に連合国内で資本主義と社会主義でズレが生じ、最終的に冷戦に発展してしまった。また、宗教問題も出てくる。現在、世界の主な宗教はキリスト教・イスラム教・仏教・ユダヤ教・ヒンドゥー教が存在する。そして、それぞれの宗教には決まりがあるが、宗教が異なる国が入り混じった連合だった場合、政策がある宗教に偏ったり、決まりに反していたりすると、またも内部分裂してしまったり、宗教が絡んでいる分、宗教戦争を引き起こす可能性が非常に高い。例を挙げると、中東戦争、スーダン内戦がある。というふうに、現時点だと、ある問題を解決しようとする、ある問題を解決することができなくなるという矛盾が生じる状態になっている。

以上のことから、世界平和を実現するためには、「約 200 の国と地域、無数に存在する民族を同じ宗教・国もしくは連合・思想に統一した上に、経済を安定させ、平等にする」ことが必要であると考えるが、現時点でこれを成し遂げるのは限りなく不可能に近い。よって、戦争をなくすこと、及び争いのない平和を実現するのは、現時点では不可能である。

第25回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和について

北海道釧路工業高等学校 3年 ^{なかむら}中村 ^{しょうま}将真

私は今の私たちが今抱えている 1 番の悩みは戦争による被害なのではないかと考えている。日本では平和主義という日本国憲法があるため戦争を起こすことはできない。そのため日本で戦争が起こることはない。しかし他の国にはそのようなものは存在していないためロシア、ウクライナ戦争やイランとアメリカの戦争など今の世界では沢山の争いが起こっている。その影響により今の日本は食品や石油など物価の高騰が激しくなってしまった。私はこのニュースなどを見た時に「なぜ物価高騰のきっかけである戦争というものが起こってしまうのか」という一つの疑問が頭に浮かんだ。戦争による被害はものすごく争っている国だけでなくその他の国々も被害を受けているはず。しかしそんなことは気にならないのかと思ってしまうほど戦争は終わらず、ずっと続いている。戦争はやってはいけないとは思いますが、やることによって得られるメリットもある。例えば大昔にあった世界一大きな戦争と言われた第二次世界大戦という戦争を知っているだろうか。その戦争では日本が負けてしまいポツダム宣言を受諾し無条件降伏をすることになってしまったが、仮にもし日本が勝っていたら大東亜共栄圏の確立により石油などのアジアの資源を確保し、軍などはより強いものになっていたかも知れない。そして日本という国は今よりもさらに大きい土地大きい存在になっていたかも知れない。それを考えると他の国が戦争をしているのはそのような今後の国の発展のために行なっているのではないかと思う。しかしそのようなメリットがあるからと言って戦争中のデメリットの大きさに勝ることはないと思う。戦争を行なっていることでそれぞれの国の被害も、ものすごいことになってしまい死者の数なども増えていってしまうことには変わりがないため被害がものすごいことになってしまうのではないかと思う。このようなことから戦争というものは減らしていくべき世界の課題なのではないか考える。今起こっているイランの戦争なども起こっていなければ石油の高騰は激しくなることはなかったのではないだろうか。これからの世界は戦争を行うことによりおこっている被害の全体像を一度見つめ直す必要があると考えている。そうすることによりもしかしたら戦争よりも良い解決方法が見つかっていくかも知れない。そうして戦争も減らすことができ私たちの生活がより豊かになり安定した生活を送ることができると思っている。そして戦争が行われている様々な国々の死者やケガ人を無くし戦争がなく一人一人が手と手を取り合える優しい世界を築き上げていくことができれば良いと思う。このようなこ

とからこれからの私たちはニュースなどに対してより強い興味を示し、今の世界を知っていく必要があると考える。そして他人事として捉えるのではなく自分のこととして捉えていく必要があると思う。

第25回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和

北海道釧路工業高等学校 3年 ^{すぎの}杉野 ^{わたる}渉

私は戦争だけが平和をおびやかしてるとは思わない。しかし、連日ニュース等で報道されている通り、ウクライナやパレスチナ（ガザ地区）での紛争が続いており、今年で4年目となる。またそれに続く中東情勢も悪化しており、戦争に巻き込まれるなどの直接的に私達の生活が脅かされることはないが、戦争が進むにつれてエネルギー価格が高騰したりと間接的に私達の生活をおびやかしていることは確かである。またこの世界情勢と重なり、円安による輸入コストの増加のせいで物価はものすごく高騰している。思い出せば10年前、私が小学1年生のときのレギュラーガソリンの価格は1リットルあたり138円でした。比べて現在の価格は、政府からの補助金が出て164円と確かに高くなっている。私はまだ車を持っておらずガソリン代も払っていないので実感しにくいですが、ガソリン高騰のニュースを見た後の反応を見ていると思わず「勘弁してくれ」との声が漏れていたりとすごく困っていた。

こんな家族の反応を見ていると、自国が戦争しているわけではなく、日常生活としては平和だが、生活環境としてはとても生きづらく平和ではないと思ってしまう。

初めのテーマで出した通り戦争だけが平和をおびやかしてるとは思わない。最近物騒だと思える事はSNSでのトラブルだ。今では小学生でも持っているスマートフォン。交通や連絡手段といったところなどでとても便利だが、使い方を間違えれば事件に巻き込まれてしまったり逆に言えば自らが加害者になりかねない危険な状況を作りかねないことになる。少し前のニュースではSNSでトラブルになってしまい、最終的に複数人からの誹謗中傷を受けてしまい自殺をしてしまったなどのニュースも複数件あった。そんなニュースを見て今のこの世の中の現状は平和ではないと感じた。自分がその年の頃はこんなことしてたななどと思ってしまう。なぜその年齢で命を落とさなければならなかったのかをとっても考えさせられる。そんなことで命を落としてしまう人がいるのならいっそのこと使用を制限したりしたほうが良いのではないかと思う。それで平和が保たれるなら全世界でそうすべきだろう。仮に自分が親の立場になってみてそんなリスクを犯してまで自分の子供に小さいうちからスマートフォンを持たせる必要はないと思う。スマートフォンの画面と向き合うより周りの友達と話したり遊んだりするほうが平和な時間を有意義に過ごせるだろうと、今の世の中を考えると私は思う。

戦争やいじめが起きないのが平和への一番の近道だろう。しかしそんな事はこの先も

絶対に有り得ない。争いは必ず起きることだし、起きた争いはそんな簡単に終わらない。どんな利益があり、どんな目的があるのかは知らない。いじめも同じことが言えるだろう。私はこれらが無くなっていち早く平和が訪れること、そして自分が無くなった後も平和が続くことを祈っています。